

心^{こころ}を二倍^にに！…若い方々^{わか}への“エール”^{かた}

そのだ ひさこ

私が教員になったのは、大学出てすぐ就職した方々より約10年遅れの30代。スタートから十周遅れのランナー。私が30歳のとき、母(60歳)は脳血栓で突然倒れ右半身不随になり、72歳で亡くなるまで、歩くことは困難であった。今から40年以上前は、介護施設も介護医療もデイケアも何もなかった。市内の特別養護老人ホームは10年待ちレベルだった。病院をあちこち転々とする日々…。母子二人の生活だったので、母の医療費のため私はやむなく教職を受けた。

実は母が突然倒れた時、私は二人めの子どもを妊娠中だった。育児休業もなく、産後、保育園の途中入園もできず、入れるまで個人の方に子どもを預かっていた。働いてきた。産後は母の病院と保育園と職場と夜の地区活動(被差別部落の子どもたちへの関わりや識字学級など)の四つをかけもちする生活だった。母の洗濯物を持ち帰り、夜中のコインランドリーで洗濯・乾燥。朝、病院に届け、連

れあいと交代で保育園にも行き、職場に向かう。夜の地区活動には夕食を食べさせ、子どもを連れていった。30代後半で子連れ「同推」(同和教育推進教員)を3年やり、あとは退職するまで担任だった。子どもが大好きで、担任しない教員生活は考えられなかった。子どもたちの優しさもいっぱいもらった。

振り返れば、4カ所を駆けめぐり、昼も夜も切れ目なくずりずりとつながった生活だったような。いつ眠っていたのか? どうやって生きたのか? 無我夢中だった。私のためにだけ、地球の自転は遅くなんかならない(笑)。どん底を精いっぱい生きてるとき、身体のかなから、なぜか言葉が湧いてくる! 私が私のために湧かせる呪文! 私自身へのエール! それは、時間半分しかないなら、心を倍にすればいいじゃない! である。

時々、教育現場の若い方々にお会いする機会がある。講演に行く

●TUNAGU IIとは 人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えるために、そのだ ひさこ先生(福岡県人権研究所理事、九州大谷短期大学講師)に執筆していただき、偶数月1日号に掲載しています。タイトルの「TUNAGU」には、人と人、心と心をつなぐ、世界をつなぐなど、「共生」と「人権」の時代の到来を願う歴代の執筆者の思いが込められています。

●問い合わせ先 教育政策課 人権・同和教育担当